



サムスンを継ぐ“皇太子”

2012年9月11日(火) FINANCIAL TIMES

韓国サムスングループは、現会長の息子の李在鎔氏が後継と目されている。韓国内で大財閥と世襲への批判が高まる中、在鎔氏は自らの能力を証明する必要がある。在鎔氏は「ギャラクシー」を成功させた隠れた実力を世界に示せるだろうか。

故李秉喆(イビョンチョル)氏は1938年に韓国で野菜を商う三星(サムスン)商会を設立した時、大きな夢を抱いていた。しかし、その李氏も74年後に自分の孫が米カリフォルニアで、世界で過去最高の時価総額を更新した企業のトップと、対等の立場で交渉の席に着くとは想像もしなかっただろう。

韓国サムスン電子は、米アップルとの米国における歴史的な訴訟で確かに敗北を喫した。だが、この激しい裁判は、韓国が貧困から繁栄へと駆け上ったわずか1世代の間に、サムスンという会社がどれほど大きな成長を遂げたかという事実を浮き彫りにした。

李王朝の皇太子



サムスン電子がスマホ販売台数で世界首位になった背景には李在鎔氏の貢献も大きい(写真:AP/アフロ)

この目を見張るような変身の象徴となり得るのが、サムスン電子のCOO(最高執行責任者)であり、サムスングループの次期会長と目される李在鎔(イジェヨン)氏(44歳)だ。

韓国の同族経営による財閥(チェボル)では、強烈なトップがグループを率いる姿が伝統的だが、在鎔氏はそうした指導力の発揮の仕方とは決別する意向のように見える。

韓国経済は文字通り、全業種が実質的に財閥に牛耳られていると言っていい。中でもサムスは突出した財閥で、韓国からの輸出の5分の1は同グループによるものだ。

李氏朝鮮王朝が倒れてから1世紀、韓国では今でも李一族について語る時、王族に対する言葉遣いをする人が少なくない。そして王位継承最有力の“皇太子”である在鎔氏は、常に強い好奇の目にさらされている。

だが在鎔氏が、そうした興味を満たす行動を取ることはほとんどなく、公的な発言も最低限に限られている。

だが、一般の目の届かないところで、在鎔氏(本人は国外ではジェイ・リーと呼ばれることを好む)は、サムスン電子が多くのお客やライバル企業、さらには中国や米国などの高官と接触する際の窓口役を務めている。

英語と日本語に堪能で、縁なし眼鏡を掛け、オーダーメイドのスーツを一分の隙もなく着こなす在鎔氏は、秘密主義で知られるサムスングループの現代的で国際的な顔なのである。

サムスングループ現会長の李健喆(イゴンヒ)氏の一人息子である在鎔氏は、幼少期から後継者としての英才教育を受けた。健喆氏が自宅で仕事をするのを好んだため、子供時代の在鎔氏は訪ねてくるサムスン幹部たちの間で成長した。80年代に毎週、在鎔氏に日本語を教えていた柳町功氏はこう語っている。

「家庭の雰囲気は在鎔氏に対して非常に厳格だった。当人は(自分について)噂されることを好まず、ごく親しい友人たちとだけつき合っていた。いずれサムスンを率いることが自分の義務だと認識しており、そのため勉強熱心だった」

慶応大学で2年間、経営学を学ぶ

青年時代の在鎔氏は、スポーツカーを乗り回し、スポーツに没頭した。馬術は、韓国代表チームに選ばれるほどの腕前だった。

それでも在鎔氏は、サムスングループを経る準備を怠ることはなかった。ソウル大学で歴史学を修めた後、日本の慶応義塾大学で2年間経営学を学び、その間に日本語を習得するとともに、日本のビジネス文化への理解を深めた。

ソウルに戻って以降、10年以上、サムスン社内のあまり目立たない立場で過ごしたが、2007年に大手顧客との関係を統括する立場に任じられた。在鎔氏は、サムスンが様々な企業と訴訟を抱えているにもかかわらず、見事なビジネス外交手腕を発揮。昨年アップル創業者スティーブ・ジョブズ氏の葬儀に、アジア人の企業経営者として唯一、在鎔氏が招かれたことは、その証しと言えるだろう*1。

しかし、在鎔氏にはまだ、韓国国民の評価を勝ち取るためになすべきことがある。

*1=フィナンシャル・タイムズはこう記述しているが、ソフトバンクの孫正義社長も葬儀に出席している

韓国内で強まる世襲批判

韓国の財閥は今、逆風にさらされている。経済成長が減速する中、財閥による経済の支配力が強すぎて中小企業を圧迫しているとの非難の声が高まっているのだ。

今年12月に大統領選を控え、政治家たちは自分こそ「経済民主化」の推進派であると主張して争い、サムスンのような企業グループの支配権を創業者一族に認める持ち株構造に非難の矛先を向けている。

在鎔氏も、自身のグループ持ち株を大きく増やした1996年の転換社債の取引を巡り最高裁で審問を受けたことがある。裁判所は不正行為はなかったと判断したが、在鎔氏にとっては不名誉な出来事だった。

韓国の財閥に関するニュースを専門に扱う人気サイトの編集者、チョン・スンウプ氏は、在鎔氏はあえて世襲の特権に不満を抱く一般国民の試金石になろうとしていると説明する。

「韓国では李氏がなぜサムスンを継がなければならないのかと疑問を抱く人が増えているため、李（在鎔）氏は、自らの経営能力を証明しなければならない。国民はもはや、息子が父の後を継ぐことを当然とは思っていない」

批判派は、在鎔氏にはサムスンのような生命保険から造船、軍事技術まで手がける巨大グループを率いるだけの経験が欠けていると論じる。在鎔氏は2009年にサムスン電子のCOOに昇格し、トップに近い地位に就いたが、まだグループの主要事業で包括的な責任を負う立場に立ったことはない。

「父親が全権握っているため、在鎔氏が経営能力を発揮できる機会はそう多くなかった」と漢城大学の経済学教授、金尚祚（キムサンジョ）氏は指摘する。

在鎔氏の近くで仕事をしてきたある人物は、こうした非難は不公平だと反論する。在鎔氏は謙虚で父親を尊敬していることから最近のサムスン電子の成功に貢献した自分の役割を声高に語らないだけだというのだ。同社の株価は在鎔氏がCOOに就いた2009年の半ば以降、倍以上に値上がりしている。

サムスンのスマートフォン（高性能携帯電話）「ギャラクシー」には「彼の功績が多々ある」と、この人物は言う。サムスは今年上半期にスマホの販売台数でアップルを抑え、世界首位に躍り出たが、それはこの「ギャラクシー」シリーズの人気のよるものだ。

鮮明な有機EL（エレクトロ・ルミネッセンス）ディスプレイの推進を主導したのは在鎔氏だったと、この人物は続ける。アナリストらは、有機ELこそ「ギャラクシーS3」の人気を決定づけた要因だと見る。

3代目はどんな足跡を残すのか

サムスは過去2年間で、スマホのいわば「脳」であるアプリケーションプロセッサへの投資を倍増させてきたが、この決定を下したのも在鎔氏だった。サムスは現在、アプリケーションプロセッサの製造で世界首位に立つ。また在鎔氏は、ジョブズ氏と同様に製品とデザインへのこだわりを持っていることでも知られる。

それでも、在鎔氏の前には乗り越え難い壁がそびえている。祖父は野菜売りの会社を船舶やテレビを輸出する企業に育て上げた。父親はその企業を、メモリーチップからスマホまで、ハイエンドの技術製品で世界のトップに立つ企業へと押し上げた。

3代目の会長と目される在鎔氏がサムスンにどのような足跡を残すのか、まだ何も見えてこない。しかし、在鎔氏は、その挑戦のために何十年も準備してきたのである。

Simon Mundy

(©Financial Times, Ltd. 2012 Aug. 31)

©The Financial Times Limited 2012. All Rights Reserved.

Users may not copy, email, redistribute, modify, edit, abstract, archive or create derivative works of this article.

Nikkei Business is solely responsible for providing this translated content and The Financial Times Limited does not accept any liability for the accuracy or quality of the translation.

著者プロフィール

FINANCIAL TIMES



FT、ことフィナンシャル・タイムズは英国ロンドンにて1888年創刊の新聞。世界の主要ビジネス情報を提供し正確で鋭いニュース、評論、分析を提供。紙面でも、オンラインでも、FTはグローバルなビジネス界には欠かせないメディアである。140カ国以上の160万人に読まれ、世界23拠点で印刷している。フィナンシャル・タイムズ紙の日本での購読に関する情報は [こちら](#)

日経BP社

日経ビジネスオンライン会員登録・メール配信 — このサイトについて — サイトマップ — お問い合わせ
日経BP社会社案内 — 個人情報保護方針/ネットにおける情報収集/個人情報の共同利用 — 著作権について — 広告ガイド

日経ビジネスオンライン SPECIALは、日経BP社経営情報グループ広告部が企画・編集しているコンテンツです。

© 2006–2012 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.